

「顧みられる神」(創世記一六・一〜一六)

1 年の聖句

今年は、久しぶりに、二〇一七年以来のようですが、元旦が日曜日です。新しい一年をこの礼拝をもって始めます。

教会の暦では、じつはまだ、一月五日まで、クリスマスの季節です。御子が生まれて一週間、割礼を受けイエスという名前を与えられるといったことなど、思い起こされるべきです(ルカ二・二一)。

今日はしかし、世俗のカレンダーに従い、まさに新しい年が始まったこと、そしてこの時を、この時代を、私どもキリスト者としてどのように歩んでいったらよいか、どのような信仰をもって向き合えばよいか、そんなことを考えながら、聖書を開き、礼拝をささげたいと思います。

そのために、今年も、『ローズンゲン』(日々の聖句)の「年の聖句」を取り上げます。今年の「年の聖句」は創世記一六章一三節、「あなたこそエル・ロイ(わたしを顧みられる神)」です。前後関係も大事なので、この言葉をふくむ一六章全体を今日はお読みしました。

『ローズンゲン』(日々の聖句)は、ヘルンフト兄弟団(ドイツ)で、およそ三百年前からつくられているものです。本来、この信仰の結社の信徒たちが、毎日、共通の聖書の言葉を読み、絆と祈りを深めるためのものです。いまや世界で使われています。毎年改訂され、今年は二九三版です。

「年の聖句」の作成のためには、委員会がつけられ、そこにはカトリックの委員も入っているようですが、毎年三年先のもので決められます。今年の分は二〇二〇年に選定されていたものです。いつも不思議なのは、こうして三年も前に選ばれた聖句がその年の世界の拠り所、私どもの灯火(ともしび)となることです。御言葉と共に聖霊が力づくよく働くのです。

そこです、この聖句をふくむ、創世記一六章について、少し申し上げておくことにいたします。アブラハム物語(一二〜二五章)の一部、イサクが誕生する一四年ほど前の出来事を記しています(アブラム、サライの最終的な呼び名、アブラハム、サラと、ここでは呼んでおきます)。

アブラハムとは、ご承知のように、イスラエル民族の父祖です。この一人の人から、すなわち、神によるアブラハムの選びから、神の民イスラエルの歴史は始まったのです。彼は、神の救いの担い手とされ、祝福と繁栄が約束されます。繁栄とは具体的に、子孫が与えられること、そして寄留の民にすぎなかった彼らに土地が与えられることです。

こうして彼が故郷メソポタミヤのハランを旅立ち、カナンに向かったのは、アブラハム七五歳、サラ六五歳のときでした。

じつは、彼らに子供がなく、サラが不妊であることは、出立以前から分かっていたことです(一一・三〇)。ですから、アブラハムが、神の召しを受け、祝福と繁栄の約束を聞いたとき、彼らにとって、それは、むしろ、大いなる希望として聞こえたの

ではないでしょうか(一二・一〜三)。

それから一〇年たって(一六・三)、あの神の約束は、じつは実現していなかったのです。中でも深刻なのは、子供が与えられないことです。子供がいなければ、自分が祝福の基であることなど、ありえない。アブラハム物語は、イサクが生まれるまでの、いわば試練の物語なのです。

前章、一五章には、子供が生まれないので、奴隷のエリエゼルを養子にして跡を継がせる計画をアブラハムがもっていたことが書いてあります。しかし神はそれを許しませんでした。そして神は「あなたから生まれる者が跡を継ぐ」(一五・四)と改めて語り、約束しているのです。

しかしそう言われれば言われるほど、九〇歳近いアブラハムと、八〇歳近いサラに可能性はなくなっていくきます。とくにサラは気持ちの上で追い込まれていったのではないかと思えます。

2 アブラハム、サラ、ハガル

今日の聖書箇所には、サラが、いわば最後の手段に訴えることをしたことが書いてあります。

それは、サラが、彼女の、エジプト人の女奴隷ハガルを夫アブラハムの側女として与え、彼女によって子を得ようとしたことです。ハガルが子を産めば、それは、アブラハムの子であり、自分の子だということになります。

この発想はサラから出たものです。アブラハムは「サライの願いを聞き入れた」(二節)とあります。

こうしたやり方を巡って、アブラハムとサラ、二人の間にどういう内容の話がなされたのか、何も書いてありませんので、ここでは、とくに詮索はしません。このことが、その時代、違法でも、不道徳でもなかったということは、言っておかなければなりません。旧約聖書は、そうして生まれることを、妻の「膝の上」(三〇・三)で生まれると表現しています。

こうして女奴隷ハガルはアブラハムの子を宿します。ところが、このことによってアブラハム、サラ、そしてハガル、三人の関係が、人間的に、ぎくしゃくしたものになります。

それは、ハガルのサラに対する態度の変化からはじまりました。ハガルがサラを見下し、軽んじるようになったというのです。

このことの不満をサラは、夫のアブラハムにぶつけます。アブラハムに訴えるのはある意味正当です。というのも、サラの女奴隷であったハガルは、いまはアブラハムの側女だからです。自分が不当な目にあっているのは、あなたがハガルを甘やかしているからだというのです。

そう言われても、アブラハムも困ります。アブラハムは、サラにこう言います。(サラよ、ハガルは、もともと君の奴隷ではないか、お前が好きなようにすればいいだろう)。こうしてアブラハムは、自らの責任を放棄します。サラがハガルにつらく当たることが予想されました。アブラハムは容認したのです。身重の奴隷女ハガルは耐えきれずついに逃げ出します。

サライは彼女につらく当たったので、彼女はサライのもとから逃げた。主の御使いが荒れ野の泉のほとり、シウル街道に沿う泉のほとりで彼女と出会って、言った。「サライの女奴隷ハガルよ。あなたはどこから来て、どこへ行こうとしているのか」。女主人サライのもとから逃げているところですよ」と答えると、主の御使いは言った。「女主人のもとに帰り、従順に仕えなさい」。主の御使いは言った。「わたしは、あなたの子孫を数えきれないほど多く増やす」。主の御使いはまた言った。「今、あなたは身ごもっている。やがてあなたは男の子を産む。その子をイシュマエルと名付けなさい。主があなたの悩みをお聞きになられたから・・・」(六〇一節)。

この箇所、一つ一つの細かい事柄はともかく、全体として、私どもの聞き逃しえないのは、神が、御使いを遣わし、立場の弱い、苦しみ悩む人に、救いの手を差し伸べておられることです。

ハガルはユダヤ人ではない、エジプト人です。ハガルは自由人ではない、奴隷の女です。ハガルは男ではなく、女です。主人の家の都合で翻弄され、苦しみます。

ここで主の御使いによって示されたのは、アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち、イスラエルの神の慈しみと憐れみは、イスラエルを越えていくことです。この神は、イスラエルだけが救われればいいとは考えていません。すべての人の神(ヨハネ福音書一・九)、苦しむ悩む者の神です。この主の御使いはイエス・キリストを思い起こさせます。彼はイエス・キリストの一つの「影」なのです(フォン・ラート。四八・一六参照)。

3 エル・ロイ(顧みられる神)

かくて「主の御使い」は、「シウル街道に沿う泉のほとり」で、ハガルに出会ってくださったのです。

シウル街道は、カナンとエジプトの間に横たわる広大な砂漠の道です。もしシウルの荒れ野に入り込んでいたら、身重の彼女の命も危なかったでしょう。そこに至る前に主の御使いはハガルのもとに急いだのです。

そしてハガルは、主の御使いを通して、呼び止め、語りかけてくださった神に、信仰を言い表します。

ハガルは自分に語りかけた主の御名を呼んで、「あなたこそエル・ロイ(わたしを顧みられる神)です」と言った。それは、彼女が、「神がわたしを顧みられた後もなお、わたしはここで見続けていたではないか」と言ったからである」(一三節)。

ハガルは、主なる神を、ここで「エル・ロイ」と呼びます。意味は「わたしを顧みられる神」です。私にも、こんな私にも、眼差しを注ぎ、目にとめ、顧みてくださったというのです。これは、異邦人ハガルの信仰の告白といってよいのではないでしょ

うか。

彼女が、神をエル・ロイと呼んだ理由が、この節の後半に書いてあります。分りにくいところがあります。他に二つの訳を紹介します。

「私はここでも、私を見守る方の後ろ姿を見たのでしょいか」と言ったからである（聖書協会共同訳）。

というのも彼女が、「確かに私は、ここで、私を顧みてくださった方の後ろ姿を見た」と言ったからである（ルター訳）。

これでもまだ分かりにくいのですが、共通して神の「後ろ姿を見た」という言葉が入っていることに注意したいと思います。

旧約の伝統的な考え方の一つに、人は神の顔を見ることは許されないというがあります（出エジ三・六）。それでも見た人はいます。例えば代表的な例を一つ上げれば父祖ヤコブです（創世三二・三一）。

他方、旧約には、神の後ろ姿を見ろという考え方がありません。モーセがイスラエルの民を率いて行くことにためらいを感じていたとき、神自ら同行することを約束します。するとモーセは、そのしるしを求めたのです。そのとき神は、モーセを岩の裂け目に押し込め、自分が通り過ぎるまで、手でモーセの顔を覆って、こう言われます。「わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない」（出エジ三三・二三）。こうして神は、確かに臨在したことを、通り過ぎてから明らかにしたのです。それが神の後ろを見る、神はその後ろ姿を通して認識されるのです。

ハガルは、聖書では、シウル街道に沿う泉のほとりで、神をエル・ロイと呼んだことになっていきます。それはそれでいいと思いますが、私は、ハガルが、主の御使いの命令に従って、アブラハムの家に戻り、従順に仕え始めてから（九節）、あのとこのことを、たまたま家に家出し、逃げ出した、あのとこのことを思い出して、この神のことを、顧みられる神と語り、告白しているのではないかと思えます。

そうです。神は、後から知られるのです。困難の只中で、苦しみの只中で、悲しみの只中では、なかなか分からない、見えないのです。見えるのは、自分にとっての不都合や不運、不幸ばかり、他人は何と幸せなんだろう。そうとしか思われないのではないでしょいか。

じっさいそうなのです。でも、過ぎ去ってしまえば、振り返ってみれば、神の後ろ姿が見えるのです。確かに、神は、私の人生に伴ってくださった、確かに、いろいろの出会いによって、あるいは人の言葉によって、私に出会ってくださった。そして私どもは後になって、ようやく「合点がゆく」（ドストエフスキー『罪と罰』から）のです。

神はエル・ロイ、わたしを顧みられる神、この御言葉をもって、新しい年歩んでまいりましょう。

（二〇二三年一月一日）